

#### 4. 自己評価計画書

						石川県立七尾高等学校	
重点目標	具体的取組	主担当	現 状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	判定基準	備 考
<b>1 学習習慣の確立と教科指導力の強化</b>							
(1) 自主的・計画的な学習態度の育成に努め、平日の家庭学習3時間以上の割合90%以上を目指すとともに、休日学習の充実を図る。	① ホーム担任・教科担任による個人面談等を充実させ、自主的・計画的な学習の取組を指導する。	各学年	平日に計画を立てて勉強している生徒は、68.5%である。 平日は予習・復習が主であり、生徒のさらなる学力向上には、休日の主体的・計画的な学習が必要である。	【成果指標】(生徒) 休日の計画を立てて学習に取り組んでいる。	休日の学習について計画を立てて臨んでいるか A 計画を立て学習に臨んでいる B 半分程度は計画を立てて臨んでいる C 1/4程度は計画を立てて臨んでいる D 何を学習するか考えていない	◆判定基準 A+Bの割合で判定 評価は 80%以上 高い 60%以上 やや高い 40%以上 やや低い 40%未満 低い	◆実施方法 7月・12月 自己評価 (全教職員)  外部アンケート (生徒・保護者)  各課調査(適宜)
	② ホーム担任・教科担任が連携して課題等の回収の徹底を図り、「生活実態調査」を利用して望ましい高校生活を実現する。	教務課 各学年	平日3時間以上の生徒が55.0%である。 ホーム担任・教科担任による予習復習を習慣づける指導が必要である。	【成果指標】(生徒) 平日の家庭学習時間が平均3時間以上である。	平日の家庭学習時間が、 A 平均4時間以上である B 平均3時間以上である C 平均2時間以上である D 平均2時間未満である		
	③ 週末を含めた学習計画の重要性をホーム担任・教科担任が指導する。	教務課 各学年	休日の学習調査は評価項目に入っていないかった。休日学習への取組を強化する必要がある。	【成果指標】(生徒) 休日の家庭学習時間が平均5時間以上である。	休日の家庭学習時間が、 A 平均6時間以上である B 平均5時間以上である C 平均4時間以上である D 平均4時間未満である		
(2) 計画的・恒常的な授業研究を実施し、教師一人ひとりの教科指導力を強化することで、生徒の学びの質を向上させる。	研究授業・教科指導研究会等を実施し、各種研修に積極的に参加するとともに、「生徒による授業評価」を活用し、教師個人だけでなく、教科全体で改善に取り組む。	各教科 教務課	「生徒による授業評価」を活用して授業改善に取り組むとともに、教科全体でも指導法の協議を重ね、研究授業・授業公開などの充実を図る必要がある。	【満足度指標】(生徒) 授業は、思考力を高めるための準備や工夫がされている。	本校の授業は、思考力を高めるための準備や工夫が、 A 十分されている B 2/3以上されている C 半数はされている D されているのはわずかである		
(3) 生徒の習熟度に応じた授業や課題の質・量を研究工夫することで全ての生徒に対応した有効な指導法を確立する。	① 学年内、教科内の連携を密にし、生徒の力を伸ばす適切な習熟度編成を行なう。	各学年 各教科	「習熟度別授業は学力向上に効果がある」との生徒評価はA+B=83.3%である。 今後更に、生徒の力に応じた指導法の改善が必要である。	【満足度指標】(生徒) 習熟度別の授業は分かれやすく、実力がついていく。	本校の習熟度別授業は、 A 実力がつき満足している B おおむね実力がつき満足している C あまり満足していない D ほとんど満足していない		
	② 教員各自及び教科が更なる習熟度授業の展開の仕方に工夫を凝らすとともに、習熟度別授業による生徒の学力の伸びを検証する。	各学年 各教科	個に応じた指導の取組の一環として習熟度別授業が行なわれ、教員は習熟度別授業の内容や展開の仕方に工夫を凝らしている。今後、習熟度別授業が確実に学力向上につながっているか検証する必要がある。	【成果指標】(生徒) 各教科で前回より模試成績が伸びた生徒の数が増えている。	各教科で模試成績の伸びた生徒が A 80人以上である B 60人以上である C 40人以上である D 40人未満である	◆判定基準 評価は Aは高い Bはやや高い Cはやや低い Dは低い	◆実施方法 8月・12月 進路課調査

重点目標	具体的取組	主担当	現 状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	判定基準	備 考
<b>2 自主性の高揚と規範意識の向上</b>							
(1) 学年会、生徒会などで組織的に取組み、自主性・自律性を備えた生徒を育成する。	① 登校指導、街頭指導、全校集会時の講話等を通して自主・自律の生活習慣の確立を図る。	生徒指導	生徒の規範意識は高く、自ら納得し自己規制するよう指導が行なわれている。 生徒指導への肯定的評価はA+B=85.6%であるが、A評価は38.8%であり、A評価を更に高めていく必要がある。	【満足度指標】(保護者) 本校の生活指導は適切に行われており、成果を上げている。	本校の生活指導(服装・遅刻・無断欠席等に関する指導)は A 適切な指導を行っている B ある程度適切な指導を行っている C もう少し徹底して指導する必要がある D 全く適切な指導とはいえない	◆判定基準 Aの割合で判定 評価は 50%以上 高い 40%以上 やや高い 30%以上 やや低い 30%未満 低い	◆実施方法 7月・12月 自己評価 (全教職員) 外部アンケート (生徒・保護者) 各課調査(適宜)
	② 生徒会の活動や部活動の状況を保護者に広報する。	生徒会 ホーム担任	授業、生徒会活動、部活動などの活動状況を保護者や地域に知らせる取組を実施しており、肯定的評価はA+B=95.8%である。今後、A評価の37.3%を更に引き上げていく必要がある。	【満足度指標】(保護者) 生徒会活動やHR活動の取組が十分知らされている。	学校公開や広報などの取組によって学校の取組が A 十分知らされている B ある程度知らされている C あまり知らされていない D ほとんど知らされていない	◆判定基準 Aの割合で判定 評価は 50%以上 高い 40%以上 やや高い 30%以上 やや低い 30%未満 低い	◆実施方法 7月・12月 自己評価 (全教職員) 外部アンケート (生徒・保護者) 各課調査(適宜)
	③ 部活動を通じて生徒の自主性・自律性を育む。	生徒会 部顧問	「部活動を通じて自主性が身についたか」の肯定評価は、A+B=72.3%である。 今後、A評価の29.9%を更に引き上げていく必要がある。	【満足度指標】(生徒) 自主性・自律性の育成、目的意識の育成、部活動は有意義で充実している。	部活動を通して、進んで物事に取り組む姿勢が A 身につけてきた B 十分とはいえないが、身につけてきている C あまり身につけていない D 全く身につけていない	◆判定基準 Aの割合で判定 評価は 40%以上 高い 30%以上 やや高い 20%以上 やや低い 20%未満 低い	◆実施方法 7月・12月 自己評価 (全教職員) 外部アンケート (生徒・保護者) 各課調査(適宜)
(2) 生徒と深く関わり人間としての「在り方生き方」を考えさせることで規範意識や帰属意識・共生意識を育成する。	① 学校行事の準備や後片付けにボランティアの意識を持って取り組ませるとともに、自ら進んで校内及び地域の美化に努める。	生徒会	学校行事の準備・清掃に協力することを通して、ボランティアの精神が生まれ、肯定的評価はA+B=84.1%と高かった。 今後も、校内や地域のボランティアに積極的に取り組む必要がある。	【成果指標】(生徒) 様々な機会を通して、生徒がボランティア活動に参加している。	校内や地域のボランティアに A 自ら進んで取組んでいる B ある程度取組んでいる C あまり取組んでいない D 全く取組んでいない		
	② 生徒理解に関わる研修会に積極的に参加し、教員の資質向上に取り組む。	総務課 教育相談	教員一人ひとりが教育相談の力を向上させ、悩みを持つ生徒の相談を適切に行なうことができるようになる必要がある。	【努力指標】(教員) 生徒理解に関わる研修会に積極的に参加し、資質向上を図る。	教育相談に関わる研修会 A 3回以上行った B 2回行った C 1回行った D 1回も行わなかった	◆判定基準 A+Bの割合で判定 評価は 80%以上 高い 60%以上 やや高い 40%以上 やや低い 40%未満 低い	◆実施方法 教育相談課調査 2月

重点目標	具体的取組	主担当	現 状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	判定基準	備考
<b>3 キャリア教育の推進と自己実現能力の育成</b>							
(1) 学校教育全体にキャリア教育を展開し、人間関係形成能力、情報活用能力、将来設計能力、意思決定能力などの生きる力を育成する。	教育活動全体を通じて、キャリア教育を推進し、挨拶する生徒を育成する。まず授業で、生徒がしっかり挨拶をできるようにする。	教務課	状況に応じた挨拶をできない生徒が少なからずいる。まずはしっかり挨拶をできるようにする。	【成果指標】（教員） 全教員が日々の授業において、開始・終了の挨拶を徹底する。	本校の先生は授業の開始・終了の挨拶指導を A 徹底してる B だいたいしている C 時々している D あまりしていない	◆判定基準 A+Bの割合で判定 評価は 80%以上 高い 60%以上 やや高い 40%以上 やや低い 40%未満 低い	◆実施方法 7月・12月 外部アンケート (生徒)
(2) 高い進路目標を持たせ、進路実現を目指す態度を早期に育成する。	個人添削等の指導を継続、強化して受験に必要な学力をつけることで、生徒が希望する第一志望校に出願する。	進路指導課 各学年	大学入試出願時点で本校の指導と自分自身の取組にほぼ満足している生徒はA+B=83.7%。A評価も44.8%と高い。センター試験が難化したにもかかわらず、数値の上昇があったのは、生徒のニーズと学校の指導が合致していることによる。	【満足度指標】（生徒） 第一志望として出願した受験校に満足している。	出願した第一志望校に A 満足している B だいたい満足している C あまり満足していない D 全く満足していない	◆判定基準 Aの割合で判定 評価は 50%以上 高い 40%以上 やや高い 30%以上 やや低い 30%未満 低い	◆実施方法 2月 外部アンケート (生徒3年生)
(3) 3年間を見通した指導体制の構築・教員全員による組織的指導体制の強化を図り、生徒の習熟度に合わせた教材の開発・利用方法の研究を進める。	難関大学の問題解法研修会を各教科で実施し、教科指導力を高めるとともに、個別指導体制を整備して添削指導に当たる。	教務課 進路指導課 各教科	生徒の多様な進路志望に対応する添削指導に資するためには、難関大学の問題解法をさらに研究する必要がある。	【満足度指標】（生徒） どの教員も生徒の質問に的確に対応することができる。	質問に的確に対応してくれる先生が、 A ほとんどである B 2/3以上いる C 半分はいる D 半分はいない	◆判定基準 A+Bの割合で判定 評価は 80%以上 高い 60%以上 やや高い 40%以上 やや低い 40%未満 低い	◆実施方法 7月・12月 外部アンケート (生徒)
<b>4 特色ある教育活動とSSH事業による人材育成</b>							
(1) 事象を科学的に探求する論理的な思考力と創造性・独創性や英語活用能力を育成し、国際的に活躍できる科学技術系人材の育成を目指す。	化学グランプリ、物理チャレンジ、生物チャレンジ、数学オリンピックなどに、積極的に参加し上位入賞を果たす力を身に付ける。	SSH推進室 教務課	化学グランプリ、物理チャレンジ、生物チャレンジ、数学オリンピックなどに、のべ152名参加した。今後は、入賞者の数を増やす。	【成果指標】（生徒） 化学グランプリ、物理チャレンジ、生物チャレンジ、数学オリンピックなどで入賞者を増やす。	化学グランプリ、物理チャレンジ、生物チャレンジ、数学オリンピックなどで、入賞者が A 15名以上である B 10名以上である C 5名以上である D 5名未満である	◆判定基準 評価は Aは高い Bはやや高い Cはやや低い Dは低い	◆実施方法 2月 SSH推進室調査
(2) 小中学生や地域にSSH事業を広報し、その成果を普及することによって本校理数科への理解を図る。	① SSH活動および成果を近隣の中学校・保護者等へ広報する。	SSH推進室 各教科	能登全域の中学生とその保護者を対象に説明会を計7地区で実施。また、理数科独自の体験入学も新たに実施され、広報活動が充実している。評価は、A=34.0%であり、今後、A評価の更なる向上が求められる。	【成果指標】（生徒） SSHの活動・成果が小中学生に広報され、理数科体験入学者が増加している。	近隣の中学校への広報活動の成果が、理数科体験入学者数の増加となり、昨年より A 20%増えた B 10%増えた C 5%増えた D 5%も増えなかった	◆判定基準 評価は Aは高い Bはやや高い Cはやや低い Dは低い	◆実施方法 7月・12月 教務課調査
	② 授業、教科研究会、学校行事および普通科向けのSSH事業を展開し、これまでの成果を全校的なものにする。	SSH推進室 各教科	シンガポールの高校生の来校やSSH発表会などの機会により、普通科の生徒にもSSH事業の成果が広がっており、評価もA=40.4%と高い。今後、A評価の更なる向上が求められる。	【努力指標】（教員） SSH事業の研究成果が全校に還元されている。	SSH事業の研究開発の成果が、全校に A 十分に還元されている B ある程度還元されている C 少ししか還元されていない D 還元されていない	◆判定基準 Aの割合で判定 評価は 50%以上 高い 40%以上 やや高い 30%以上 やや低い 30%未満 低い	自己評価 (全教職員)

(注) 評価が「やや低い」「低い」ものについては、早急に改善策を検討する。